

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：24403

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H05580・19K20789

研究課題名(和文) 性質・状態の意味を表す日本語動詞「スル」の用法と英語の対応表現に関する研究

研究課題名(英文) A study on the usage of the Japanese verb "suru" to express the meaning of attribute/state and its corresponding expressions in English

研究代表者

大神 雄一郎 (Ogami, Yuichiro)

大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授

研究者番号：80826339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：動詞「スル」を用いて対象の性質や状態について表す「XはYをしている」という形式の日本語構文について、多様な表現の事例に細やかに目を向け、その実態について見通しを深めた。これにより、当該の構文に「発現性」と「統合性」という意味的特徴が認められることを示した。加えて、問題となる構文の表現のうち、無生物に言及するタイプの表現および複合名詞を用いるタイプの表現について分析を行い、その成立には比喩的な認知能力が関わっていると考えられることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の考察対象は、典型的には動作の遂行や活動の実施を表すものと考えられる「スル」という動詞を用いて対象の有り様に関する意味を表す興味深い表現のタイプである。本課題の取り組みを通じ、問題となる構文の言語的実態について、従来の研究においては示されてこなかった知見が得られ、その意味的特徴と成立メカニズムについての見通しが深められたと考えられる。ここで得られた成果は、動詞「スル」の全容解明に貢献するものと期待される。

研究成果の概要(英文)：This project looked closely at various examples of the Japanese construction in the form of "X is doing Y," which uses the verb "suru" to describe the attribute or state of an object, and deepened our understanding of the actual state of it. It was shown that the construction in question has the semantic characteristics of "expressivity" and "integrity". In addition, among the expressions of the syntactic constructions in question, the types of expressions that refer to inanimate objects and those that use compound nouns were analyzed, and it was found that figurative cognition is considered to be involved in their formation.

研究分野：認知言語学

キーワード：動詞「スル」 「XはYをしている」 状態・性質 意味的特徴 成立メカニズム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究課題において考察対象とする「XはYをしている」形式の日本語構文は、「する」という動詞を用いて対象の在り方に関する意味を表す興味深い表現である。この構文は、日本語学や言語対照などの観点による先行研究において「青い目をしている」型構文などの呼称を与えられ、従来は主にその成立条件や成立基盤に関する分析と考察がなされてきた。しかしながら、先行研究においては、問題となる構文にどのような事例が認められるかということについて詳細に捉え切れておらず、その言語的事態は十分に明らかにされているとは言い難い状況であった。また、このことに伴い、当該の構文の意味的特徴や成立メカニズムについては、言語事実をふまえての適切な説明づけが行えていなかったといえる。こうしたことから、この構文の意味や成り立ちについて明らかにするには、まずはどのような場合にどのような表現が成立可能かを見極め、そのうえで多角的に検討を行うことが必要と考えられた。

2. 研究の目的

研究開始時点の状況をふまえ、本課題は、考察対象とする日本語構文に関し、事例の観察と分析を重視し、いかなる表現のタイプが成立可能かを明らかにすること、認知言語学の視点から、事態の概念化と言語化の様式に目を向け、その意味的特徴と成立メカニズムについて見通しを示すこと、異言語(英語)における対応表現との比較を通じ、その言語的特徴について検討する手がかりを得ること、という目的を持って遂行されるものである。言語事実を適切に拾い上げ、信頼性の高い見通しを得ることが要件となる。

3. 研究の方法

研究の目的 に関しては、コーパス、辞書類、文学作品などから問題となる構文の表現の例を集めつつ、さらにWEB検索を通じて事例を広く収集することにより、日本語の日常的な言語場面において実際にどのような表現が用いられ、成立し得るのかについて検討を行った。ここから得られた見通しについては、言語学や言語教育学を専門とする様々な分野の研究者に協力を得て容認度の確認を行い、個別的なヒアリングの実施を通じてその妥当性についての検証にも取り組んだ。研究の目的 については、関連する先行研究の知見を参照しつつ理論的な考察を行い、得られた見通しを国内外の学会や研究会で発表し、関連分野の研究者と対話を行いながら検討を重ねた。研究の目的 については、所有の意味を表す英語動詞 have の用法に注目し、認知文法における主体化の観点を取り込んで、理論的な考察を試みた。

4. 研究成果

本課題の遂行を通じ、上掲の「研究の目的」に挙げた各項に関し、概略、以下の成果が得られた。それぞれの成果については、関連する学会や研究会での口頭発表および学術論文において公開を行っている。

事例の収集と分析を通じての言語的事態の詳述：

問題とする構文の表現に関し、Y項に置かれる修飾要素と名詞句の組み合わせを広く見渡し、その共起パターンについて一定の見通しを得た。また、先行研究においては「成立しない」とされてきた表現として、「XはYをしている」という表現形式のX項に無生物を指す名詞を置くタイプの下位事例(「丸底フラスコは細長い首をしている」など)、Y項に複合名詞を置くタイプの下位事例(「あの人は富士額をしている」など)の実例を広く収集し、実際にはこうしたタイプの表現にも適格なものとして成立する場合が認められることを明らかにした。

認知言語学的観点による意味的特徴と成立メカニズムの検討：

事例から得られた言語事実の分析と考察を土台に、問題となる構文の意味的特徴の一端を明らかにし、また、様々なタイプの事例の成立に関わる認知的要因について検討を行った。具体的に、当該の構文の表現全般に関わると考えられる意味的特徴として「発現性」と「統合性」という見方を提案し、合わせて、特定のタイプの表現の成立にイメージ・メタファーを含む比喩的な認知が関わっていると考えられることを示した。これらの成果は、さらなる検討の対象として、本課題終了後のさらなる研究の発展にもつながっている。

異言語の対応表現との対照研究に向けての取り組みの開始：

本課題において問題とする日本語表現と、英語動詞 have の拡張的用法との見比べを通じ、認知言語学の分野で「主体化」と呼ばれる現象が両者に共通して関わっていると見る可能性を指摘した。この問題に関しては、さらに他の言語的特徴にも視野を広げながら検討を重ねることが求められるが、本課題の遂行を通じ、その筋道が得られている。また、本課題の遂行により得られた知見については国際学会の口頭発表においても報告を行い、英語以外の外国語との対照を射程に含むさらなる研究の展開に向けて萌芽的な取り組みに着手している。

以上が本課題における主立った成果となるが、これらと合わせ、関連テーマとして、移動表現と時間表現における「視点」の置き方をめぐる問題についても認知的メタファー研究の観点から研究を進め、国際学会における複数の口頭発表を含む一定の成果を得ることができた。この取り組みに対しては、文化的観点を重視して言語の研究を行う海外の研究者らから好意的な反応が寄せられ、建設的な議論の場が得られると同時に、共著論文集（現在編集中）への寄稿の機会を得るなど、さらなる展開が期待できる状況となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大神雄一郎	4. 巻 6
2. 論文標題 状態・性質の「する」構文における修飾要素と身体部位名詞を用いた表現の意味と成り立ち	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知言語学研究	6. 最初と最後の頁 86 - 109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大神雄一郎	4. 巻 113
2. 論文標題 表現学関連分野の研究動向 認知言語学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表現研究	6. 最初と最後の頁 113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大神雄一郎	4. 巻 19
2. 論文標題 「青い目をしている」構文再考 「男好きのする顔をしたあの娘」はどこからやってくるのか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 24 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yuichiro Ogami
2. 発表標題 The stative/attributive X wa Y o shiteiru pattern with compound nouns
3. 学会等名 Linguistics and Asian Languages 2022（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大神雄一郎
2. 発表標題 無生物の構成部分について述べる状態・性質の「する」構文の表現
3. 学会等名 現代日本語学研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大神雄一郎
2. 発表標題 状態・性質の「する」構文に関する研究の現状と展望
3. 学会等名 マルチモダリティーと言語
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuichiro Ogami
2. 発表標題 The conceptualization of TIME AS A VISITOR in Japanese
3. 学会等名 The Third Cultural Linguistics International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ogami, Yuichiro
2. 発表標題 The Japanese 'X wa Y o siteiru' Pattern as Simple Stative Expressions
3. 学会等名 Linguistics and Asian Languages 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 大神 雄一郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 294
3. 書名 「なる」構文の多義性とそのメカニズム	

1. 著者名 米倉よう子・山本修・浅井良策（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 ことばから心へ 認知の深淵	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------